

あると思う。第二の部分、即ち慈童の物語は、いかにして成立し發展したか、またこの物語は、まず菊水傳説があつて、それに慈童が附加されたと考えられるが、その徑路は如何、というような問題については、遺憾ながら私は未だ明らになし得ていない。

太平記や謡曲に登場する周の穆王、魏の文帝、彭祖等は、何等かの意味で中國では有名な存在であるし、多かれ少なかれ神仙譚に關係している人物である。しかし、これらの人と慈童との關係については全く不明である。慈童という名も古書に存するか否か未詳である。もとよりこのような傳説は史實としての信憑性を要求することは誤りであるが、これに先行する同一か少くとも類似した物語が存在すべきだと思ふのである。しかしただ、部分的關連あるやに思われる記事のいくつかを見出し得たに過ぎない。

或は思うに、慈童の物語はその性格上、中國の神仙譚に所を求めるよりも、佛教説話の中に求めるべきであるかも知れない。もし神仙譚や佛教説話の中に出典を發見し得なければ、それは太平記以前に於て、日本の何人かの手によつて創作されたことになるのであつて、識者の教示を仰ぎたい。

(一九六一・一〇)

中國佛教における人間平等の倫理

道 端 良 秀

一、人間平等の原理

一、男女平等の問題 三、身分階級の差別否定 四、人間平等の權利

中國佛教は隋唐に至つて、各宗が獨立して、ここに眞の中國の佛教が成立するのであるが、近世に入ると禪と念佛だけとなる。佛教はいかに分派しても、その目的は一つで、佛になると云うことである。人間が佛になることが出来るのは、佛になる佛性を有しているからで、これが「一切衆生悉有佛性」と云うことで、ここにあらゆる人々の平等の原理がある。

更に佛も我も同じであるとする考え方、總てが一如から出て來たとする一如平等の思想は、人間のみならず、總ての生きとし生けるものも一つであるとする考え方、總ての生きたるものに展開している。

この平等の原理の上に立つて、中國佛教史は色々と展開して行くが、第一に男女平等の問題を考えて見ると、中國社會にあつて、女性は常に男性の奴隸とされてきたもので、それが法律にも道德にも規定されていた。この男女不平等の社會に、男女平等の佛教が流傳されて來た。

先ず佛教々團内に於いて、インドに於いて行われたように、中國に在つて早くも中國人による尼僧教團の成立があつた。これが六朝になると、立派な尼寺が外く建立され、又僧官が制定されると、同じように尼僧も僧官に任ぜられて、尼僧教團の統制に當つた。

一方在俗信者に對しても亦男女平等の立場を取つてゐる。今金石文に於ける鐘銘を見ると、多くの施者の人名と金額が記せられてゐるが、ここでの男女の性別、貧富貴賤の別、老若の別

など、少しの差別もなく、全く平等である。

第二は身分階級の差別の否定と云うことである。中國社會にあつては、常に封建的な社會であつたから、身分階級上下は特に厳しかつた。ここで佛教はせめても佛教々團内だけでもと、特に最下の身分、奴婢を出家せしめ、出家教團にて、過去の身分階級を捨てて、悉く平等たらしめた。一度奴隸が出家教團に入つた場合は、も早奴隸ではなく、たとえ王の出家と同席した場合でも、その席の序列は、出家年月の先後によつて決定された。奴隸が先であれば、王の先に席があつても何不思議はなかつた。

このように僧伽の教團は皆平等であつて、そこに何ら身分や階級に關係なく、悉く否定された。又在俗にあつても同じであつて、淨土往生も悉く同一資格であつたし、天子であつても、惡業によつて地獄の苦を受けた多くの例が示されたことに於いて知ることが出来る。第三は人間平等の權利の問題である。人間は平等であるから、その平等の權利を主張することは許さるべきことであり、これを實踐することは何ら不思議でない。中國佛教でも、封建社會下とはいひながら、佛教にあつては、この平等の原理の上に立つて、その權利を主張した。圓仁の「入唐求法巡禮行記」に五台山金閣寺の齋會は、僧俗男女老少を簡ばず、等しく平等に一人間として施食するが、これは文殊菩薩が妊婦となつて、腹中の光も同じく一人の人間として要求する權利ありとしてこれを乞うたことから、すべての人々に平等に施食するようになったと記している。

この平等の齋會はこの時に始められたのではなく、早くも六

朝の梁武帝によつて、盛んに行われたもので、これを平等大齋、無碍大齋、道俗大齋などと呼ばれ、後に陳の武帝も文帝も宣帝も、又唐の中宗なども、この無遮大齋を行つた。

以上の如く中國の封建社會下、身分階級の嚴重な社會にあつて、佛教は平等の原理に立つて、中國佛教として發展して行つた。

清澤滿之の外俗内僧の自覺をたずねて

松 原 祐 善

清澤滿之は文久三年（一八六三）六月二十六日名古屋市に生れられた。従つて明後年は、先生の生誕百年を迎えることになる。逝かれたのは明治三十六年（一九〇三）六月六日、三河大濱の西方寺にてその四十年の短生涯を閉ぢられたのである。しかしその短生涯を以て果遂された先生の精神的偉業は、年月を距て更に時代を距つると共に愈々不滅の光を輝かし、明治佛教界の高峯として、近代佛教史上に重要な歴史的位を擔えるものとして愈々重きを加えてきた。先生は若くして西歐の哲學を専攻し、新しく明治の日本に攝取された西歐の近代文化と對決して、東洋の傳統である佛教をして、その本来のあるべき姿、あらねばならない姿を、理論のみではなく、身の實踐實行を以て日本の近代史にこれを開示し展開されたのである。思うに先生の活動が當時における大谷派本願寺という宗門を舞臺として狭く限られていたのであるが、その事業の爲され方が實に大きいといわねばならない。もとより如來を信ずる信念の發露